聖ヶ丘

第45号
2023･6･11 発行
金光教教学研究所

さあ、アーカイブしなくちゃ！

所長　大林　浩治

この春、こんな二つの新聞記事が目にとまっちゃった。それは、朝日のコラム、「多事奏論」（岡崎明子さん三月二九日付、田玉恵美さん四月一九日付）。

岡崎さんは、森友、加計学園をめぐる決裁文書の改ざん、イラク日報の隠蔽が問題になったころに取材していたんだって。彼女は、「総理のご意向」と書かれた文書を調査したとき、改行や句読点の打ち方から、どれが文書の原案になったかをアーキビストに指摘してもらい、ずいぶん助けられた、と書いていたんだ。

アーキビストとは、「膨大な文書の価値を見極め、管理・保管する」専門職のこと。でも、欧米とは違って、日本ではアーキビストの存在すら知られていないらしい。だから彼女は、こう述べるんだ。「日本の公文書管理体制が信頼に足るものであれば、行政文書を「捏造だ」と言い張るような大臣も、現れなかったはずだ」。

なるほど、なるほど、これは大事な指摘だぞ！

たしかに「桜を見る会」の記録もないとされたし、年金記録だって消えていた。最近では、連続児童殺傷事件など重大事件の記録も廃棄されていたなあ…。

それにしても、高飛車にものを言うあの大臣は、「作成者不明、配布先も不明、作成目的も不明。いわば怪文書の類いだ」とし、元部下の仕事を捏造だと決めつけていたよね。言われた部下はきついよなあ。そう思っていたら、今度は、別の記者の田玉さんが、そのことを記事で書いていたよ。担当の課長は、板挟みにあったさなかで異動し、後任は置かれないままになっているって。

田玉さんは、これに関連した放送行政の件で、二年前に社説を書いたらしい。でも、そのことで総務省課長から猛烈に抗議を受けたんだって。で今回、それを思い出し、文書の開示請求をしたんだそうな。そうしたら一ヶ月後に届いた回答は「不存在」！

あっけにとられる田玉さん。「あんなに怒っていたのだから当然後世に残すべく文書にしたのかと思ったが、すでに歴史上になかったことにされていたとは」。

そんな田玉さんが、別の官僚から聞いたのはこんな話だって。「最近上司から「文書は詳しく書きすぎる必要はない」「フォルダーに文書を残すな」と指示を受けた」。

最初に紹介した岡崎さんは、「資料管理を官僚だけにまかせると、国民ではなく、組織に役立つかどうかが、判断の基準になりかねない」と

言っている。だから専門性が必要なんだね。そして、国立公文書館の館長を務め、認証アーキビスト制度導入に尽力した加藤丈夫さんから聞いた、東大名誉教授の御厨貴さんの言葉を紹介しているよ。

それは平成から令和になった早朝のＮＨＫラジオでのこと。アナウンサーから「令和の時代にまず取り組むべき課題は」と聞かれた御厨さん。こう答えたんだって。「それは公文書管理です」。平成時代に起きたさまざまな問題は、国の記録管理がずさんだったことに原因があるからだ。御厨さんは、そんな説明をしたそうな。

◇

さてさて、以上の話が目にとまったのは、それが研究所に置かれた「資料室」の御用に関係しているって思ったからなんだ。

昨年、他の教派の研究者に、資料室員を紹介したんだけど、すごく興味持ってもらえたなあ。「アーキビストですね。いいなあ。うちの研究所にも、ぜひ必要だと言っているんですが。でもねえ…」って。なんだか、教団付置の研究所での文書管理は、他の教団ではいろいろ容易でない問題があるようで。なんだか国と同じような問題を感じてしまうんだけど…。

資料室の御用は、各教会、信徒の記録資料とともに、教団各期の教務・教政文書の管理・保存が主たる内容なんだ。当然のこと、教学的見地から文書の価値を見極める専門性が要求されるってワケ。注目できるのは、その御用が、教学研究所規程（第六条）で「資料室」が定められているように、全教的に認知されており、時々のご当局からも深い理解を得て今日に至っているってことなんだ。これは、ほんとにすごいことだと思う。アーキビストとして専門性が認められているのも、教務教政から距離をとるべき教学研究の本質が反映しているんだよね。

ところで、「いよいよ」というか、「やっと」というか、その資料室を中心に、この春から、昭和末から平成期にかけての教団史の資料を収集・管理しようという動きが出てきたんだよね。いいぞ！いいぞ！

国の方では、文書管理への配慮のなさが、それまでの経緯を無視する姿勢と結びつき、政治のゴタゴタを生んでいる。行政による恣意的な文書廃棄の危険性は、歴史からの問いかけをないがしろにしているのを意味するんだけどね。それはともかく、研究所でなされるアーカイブは、決してそんなことにならないよう、これを機にますます全教の理解が求められるよね。

どうぞ、資料室の先生方は、教学研究としての専門性がいかんなく発揮されるよう、確実な取り組みをしていってね！

（兵庫・出石教会）

◇令和五年度の計画◇

本年度は、研究生一名を加え、所長以下総勢一六名でのスタートとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

紀要論文講読セミナー

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各日一三・〇〇～一四・三〇

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取り組みです。

本年は、次の四本の論考を取り上げます。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部フェイスブック、教学研究所ホームページなどを通じて随時ご案内いたします。

〈実施済み〉

第一回　五月一〇日（水）　**担当・須嵜真治**

大林浩治「一教独立とその課題―佐藤範雄の宗教法制度化要求―」　（第三七号）

〈予定〉

第二回　七月一〇日（月）　**担当・堀江道広**

竹部弘「天地と心の構造」　（第三六号）

第三回　九月二二日（金）　**担当・橋本雄二**

大林浩治「教祖をあらわすこと、その表現行為の意味―大正末から昭和初期の教祖像に見る現代化の形象―」　（第四五号）

第四回　一一月一〇日（金）　**担当・塩飽　望**

岡成敏正「『覚帳』に見られる親子関係についての一考察―金光大神とその長男浅吉の生活史を中心として―」　（第一一号）

第六二回教学研究会〈予定〉

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】六月二一日（水）

昨年同様、本年も来場参加とオンライン参加を併用する形で、開催します。内容は、個別の研究発表と、「今、「歴史」歴史はどう立ち現れているか」をテーマとした全体会（テーマ解題・話題提供・討議）を予定しています。

第二四回教学講演会〈予定〉

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】九月三〇日（土）夕刻

生神金光大神大祭第一日の前夜に、紀要第六三号の研究成果を題材にした教学講演会を開催する予定です。

教団付置研究所懇話会第二一回年次大会〈予定〉

【場所】金光北ウイングやつなみホール

【日時】一〇月三一日（火）

同会は、本所含め、現在二九の各教宗派研究機関で構成されています。本所は、それら研究機関及び研究者との交流を通じて、各教団における「教学」の現状を確認し、現代における課題意識、方法論の相互研鑽に努めることを目的として、同会に参画してきました。

本年は、本所が運営を担当し、「社会の変化と信仰―いま、どこで、何が、どのように問われているか―」とのテーマで年次大会を開催します。本部当局、金光図書館をはじめとする関係各機関のご理解、ご協力を得つつ、職員一同力を合わせて取り組んで参ります。

第一七回教学に関する交流集会〈予定〉

【場所】本部総合庁舎一階展示室

【日時】一一月一五日（水）

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願っての取り組みです。

昨年に引き続き、本年度も金光図書館の協力を得て、開催します。内容は、教祖の事蹟に関する知見等の紹介と懇談を予定しています。霊地在住の方はもちろん、どなたでもご参加頂けます。

参加希望の場合は事前にご連絡ください。

○

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図ってまいります。

また、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、一般諸学問や他の教宗派との研究交流を行っています。

これらの取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりたいと存じます。

◇令和五年度研究題目◇

〈第一部教祖研究〉

・神職資格喪失以降の金光大神の信仰活動の様相―主に萩雄との関わりに注目して―　**所員　岩崎繁之**

・「金乃神様金子御さしむけ覚帳」に見る「さしむけ」の様相―金光大神のもとを訪れた者への金銭融通に注目して―　**所員　堀江道広**

〈第二部教義研究〉

・金光大神と戦争―平和論、救済論に向けて―　**所員　高橋昌之**

・教祖とその家族について　所員　塩飽　望

〈第三部教団史研究〉

・生きられた「教祖」の諸相―昭和四〇年代以降を中心に―　所員　白石淳平

・昭和末、平成初期における教団動向と「教団」という経験　所員　山田光徳

・メディア環境と信仰表明
―安田内局以降の取り組みを中心に―　所員　須嵜真治

・教団史資料の総合的管理・運用方途の整備　所員　森川育子

ニューフェイス

書記　安武　格　（福岡・吉井教会）

「人間は考える葦である」とは、フランスの哲学者パスカルの言葉です。私は、宿舎から毎日歩いて研究所に通っているのですが、その道程には、葦と思われる植物が生えています。研究所まで続く坂道を、葦を横目に自分の足で登っていると、いろんな考えが浮かんできます。

慣れないうちは、息も絶え絶えで本当にしんどかったのですが、次第に坂を登り切ればゴールという「希望」を感じるようになってきました。しかし慣れてくると、今度は「希望」とは抽象的なイメージであり、それを「喜び」という具体的な実感に変えていきたいなと思うようになりました。そう考えていくと、「希望」を持ってお参りされて、それが「喜び」に変わっていくというのは、まさにお広前の働きみたいだなあ、と思うようになりました。

そんな風に日々の道中で考えが進んでいくと、研究所が険しい坂道の上に建っている理由も分かってきたような気がします。この坂道を登る時間というのは、いろいろな事を考えたりひらめいたりする時間なのだと、私なりに解釈しています。

今まで、多くの方がこの坂道を上り下りされ、いろいろな事を考えられてきたのだろうと思います。私もその歴史に倣って、考える葦（足）として、研究所に日々通いたいと思います。

Let's go trekking!

研究生　森定　展開　（香川・玉藻教会）

何らかの事柄に出会うと、兎角「あぁ、これはそういうことね」と通り過ごしてしまう傾向が私にはあります。それは、自分の中で腑に落ちていることや経験的に処理が済んでいる何かしらの法則に当てはめたり枠を設けたりすることで、一種の〝気持ちよさ〟、〝心地よさ〟のような感覚が得られるからかもしれません。

しかしながら、「では、金光教祖はどうであったか」という一つの視点を持った時、長年形作られてきた私の中の当たり前について、今一度立ち止まってみる必要があるのではないかと思わされます。

物事を多角的な視点で捉えることで、ひょっとすれば目前に広がる世界がもっと立体的に感じられるのではないか、いや、そもそも世界という言葉にすら収まらない、全く別の〝なにか〟との出会いが在るのではないか。

このたび、教学研究所という環境の中に身を置かせて頂く事となり、新たな出会いへの好奇心を大切に、様々なことを求めていきたいと思います。

随想

研究員
高橋　修一

目の前の人の助かり

私は昨年の五月から金光教平和活動センター（ＫＰＡＣ）事務局の御用を頂いています。ＫＰＡＣは、フィリピン・タイ・カンボジアの貧しい家庭の子ども達が教育を受け、貧困から抜け出すための支援をするＮＰＯ法人で、これは原爆死没者の慰霊と平和祈願に長年取り組んできた「広島平和集会」がもっと直接的に平和への取組を実践したいという願いから設立されたものです。お役を頂いてから一年が経ち、まだまだ分からないことばかりではありますが、フィリピンやカンボジアの貧困層の人々の厳しい実際を知り、少しでもお役に立たせていただければ、との祈りを強くさせられます。とはいえ、貧困の問題は根深いものがあり、解決の筋道もなかなか見えない状況で、自分の無力さも感じさせられます。

そんな私の頭に最近よく浮かぶのが、教祖様の「此方は、人が助かりさえすれば、それでよい」とのお言葉です。このお言葉は、教団組織化のために教えを残すことを佐藤範雄師から進言された際に教祖様が仰ったお言葉です。世の中の制度やご自身の御神勤をめぐる環境が目まぐるしく変わる中にあってのこのお言葉が、教祖様のご姿勢を端的に示しているように思います。

教祖様は世の中の大きな、そして多くの難儀を見据えられた上で、お結界に座り切り、参りくる人々を一人ひとり取次がれました。そのみ思いは計り知れませんが、難儀に苦しむすべての人を助けるという大きな願いを持って、目の前の人の助かりに専念されていたのだと、拝察しています。そうした中から、助けられた方々が各地に道を伝え、そこで新たに助かりが生まれ、教祖様の願いが実現に近づいていったのです。さらに言えば、教祖様を支えた奥様や周りの人々の働きも、教祖様の御神勤の内容とも捉えられます。

ＫＰＡＣの始まりにおいても、東南アジアでの支援が即座に世界平和を実現することになるわけではない、という思いは発起人の方々にもきっとあられたでしょうし、ＫＰＡＣの事業を進めて来られた方々も、現地と関わりを深め、成果が出る中にも、それでもまだ手が差し伸べられていない多くの人々の姿にも気づいてこられたのではないかと推察します。しかし、そのような葛藤がありながらも、手を差し伸べられるところでの助かりの実現に動かれ、それが今日まで継続してきていることは、大変尊いことです。「一食を捧げるチャリティ」への献金等で支援しておられる方々も、「人が助かりさえすれば」との願いでのことと思わせていただきます。

ＫＰＡＣは東南アジアを中心に支援を行っていますが、世界に目を向ければ、ここ一年ほどだけでも、ロシアのウクライナへの軍事侵攻、トルコ・シリアでの大地震被害、スーダンの内戦など、多くの命が失われる悲惨な出来事が次々と起きています。また、国内外問わず、ニュースにならない様々な難儀も現実には数限りなく起きています。そのすべてに対して何かできるわけではありません。そうした考えから、目の前のことにも二の足を踏むことが私にはよくありますが、そんな時、教祖様のお言葉とご姿勢が、取るべき行動への道標になると感じています。

自分の手元のことに取り組むことは、些細で何でもないことのように考えがちですが、それを教祖様、そして金光様のお手代わりとして、神様の御用としてさせていただけば、世界の平和と人類の助かりにつなげていくことになると信じています。大きな願いを持ちつつ、まずはご縁のある中で、目の前の人の助かりに尽力させていただきたいと思います。

（岡山・岡東教会）

研究所の昨今

佐藤光俊・金光和道先生を偲びつつ

第三部部長　白石淳平

研究報告検討会が終わった今年の三月初旬頃だったろうか。一〇年前、本所主事を退かれることとなった川越(旧姓：金光)未来子先生のご厚意により、毎年花を付ける多年草だからと植えられたスイセンが、今年も変わらず本所玄関脇に白い花を咲かせていた。その凛とした姿にふと目が留まり、なんだか心が暖かくなった。そして気が付けば、梅の花が開き、桜が散り、緑眩しい夏を迎えようとしている。その都度、その瞬間の、一回性の営みの尊さが、繰り返し、変わらない大きな祈りと願いに支えられてあることの有り難さを、しみじみと思わされる。

さて、「令和五年度の計画」(三頁)でも紹介されているように、本所は今年、教団付置研究所懇話会・第二一回年次大会の当番研究所として、このご霊地に参加者をお招きしての大会を開催するべく、準備を進めている。

同懇話会は、現代社会の諸問題に対して、仏教、神道、キリスト教、新宗教等、各教宗派の壁を越え、宗教者である研究者が広く交流を深め、相互協力を進めることを願いとして発足した。今として振り返ってみて大事なのは、そのはじまりが、世界観、人間観をめぐる宗教間の対立が顕著に表出した平成一三(二〇〇一)年の「9・11同時多発テロ」を契機として、翌一四年に、本所を含む一三教宗派の研究機関による準備会が立ち上げられたことに遡る、ということだ。そして、同準備会へ向けた呼びかけ人の一人として、また平成一七年からは顧問として、同会の運営を支え続けて下さったのが、発足当時に所長であられた、故佐藤光俊先生であった。

ところで、本所が当番研究所として金光で大会を開催するのは、今回で二度目となる。初めての金光開催となった第九回大会(平成二三年)において光俊先生は、教務総長として歓迎の挨拶を述べられ、同会の意義を次のように再確認している。

すなわち、発足以来約一〇年の間に、より混迷を極めてきた時代社会だからこそ、「お互いの信仰に基づく研究の実状を伝え合い学び合い、信仰や宗教が果すべき役割と共に、研究を成り立たせている人間性や考え方、そして心情にまで、思いを及ばせていくこと」が重要なのだと。

第九回大会当時、担当副査として目の前の大会運営業務で精一杯だった助手の私は、当日の雰囲気も相俟って、日頃から関心を向けていた時代社会の状況やその課題が、広く人間の生に関わる問いとして、宗派の枠をこえて議論されるありように、研究者を志す者として襟を正されると同時に、なんだか心細い自分の背中を、大きな手でグッと押されるような、そんな暖かなワクワクをどこかで感じてもいたのだった。

しかし、さらにそこからの一〇年間、そのすぐ翌年に起こった東日本大震災をはじめ、昨今のコロナ禍やウクライナ情勢など、さらなる社会の揺らぎを経験することになろうとは、当時は想像さえできなかった。

そして本年、そうした激動を経て改めて、社会の変化の中での信仰と、その救済の可能性について議論するべく、第二一回の大会が、再び金光で開催されようとしている。そのような今

だからこそ、自分を研究へと向かわせる人間の生の基盤へ、じっと、眼を凝らさねばならないのではないか。先人の祈りと願いの声が、響いてくるように思えてならない。

◇

そんな、教学研究の〝開かれ〟へ向けて蒔かれた先人の祈りと願いは、また別のところでも芽を吹き、花を咲かせ続けている。

今から六年程前、京都女子大学の梅田千尋氏を通じて、本所紀要掲載の資料論考（金光和道「和算家としての小野光右衛門―小野家資料、特に『啓廸算法指南大成』、『神道方位考』を中心に―」）の、『新陰陽道叢書』第三巻（近世編）への転載依頼が、名著出版より寄せられた。同書は、前作の『陰陽道叢書』から四半世紀を経て蓄積を増した研究成果を踏まえ、陰陽道の通史を展望するべく企画されたもの。金光図書館長であり本所嘱託であられた故金光和道先生により、平成二一年に執筆された論考が、近世陰陽道研究の重要な蓄積の一つとして、八年の時を経て、その御帰幽後に改めて見出されたのだった。

ご遺族への確認や、資料の再確認を経て、和道先生の論考を再録した同書が刊行されたのは、コロナ禍の令和三年四月のことだった。その時期、新たな資料を手がかりに、金光大神と金神との関わりを明治改暦に着目して研究していた私は、社会情勢も重なって、単なる偶然とは思えない不思議なご縁を感じずにいられなかった。

そして驚くことに、この話はそれで終わらなかった。同書の増版の報が届けられた頃、にわかに、小野家資料関連の問い合わせが、教外の各所より寄せられることとなったのだ。

二松学舎大学創始者の三島中州は、小野光右衛門の娘柳（りう）の子、つまり孫であったことが知られており、昨年、同大学の創立一四五周年記念として、小野家旧蔵資料の展示が行われた。そして、次の一五〇周年へ向けての調査として、同大教授の町泉寿郎氏が、『神道方位考』等の小野家資料の調査に来所されたのだ。

さらにまた、それとは別に、小野光右衛門の三男とされる、神奈川県大磯小学校の初代校長小野懐之についての問い合わせが、同時期に重なって寄せられてもいたのだった。

さて、そのようにして、思いもかけず所外から次々に寄せられる研究的問い合わせに、幹事の山田光徳所員や資料室の先生方と共に対応する日々を過ごしていると、教団付置研究所懇話会にかけられた光俊先生の願いも重なりつつ、ともすれば「本教」という枠の中に閉じがちな信心の視界の開けが、絶えず願われてきての今だということを、切に思わされるのである。

その御帰幽から一〇年の時を経て、改めて、佐藤光俊、金光和道両先生のお姿を偲びつつ、ここからの教学研究の裾野の広がりへ向け、日々の一歩一歩から生まれるワクワクを、じっくりと、大切に、育んでいきたいと思う。

（愛媛・南宇和教会）

研究生講座「各論5」（7月1日、講師　研究員 西村明正先生）

令和四年度研究報告・業務報告を振り返って

実践から見えてくる信心

第一部所員　堀江道広

令和四年度研究報告を書くに当たって、私が考えさせられたのは、「鶏が先か、卵が先か」というような、原因と結果で考える直線的で単純なことではなく、複雑な関係性でした。それは、「金乃神様金子御さしむけ覚帳」（以下、「金子覚帳」と略記）の解読に始まり、金光大神の元を訪れた者に対する金銭融通の実態を明らかにしようと研究を進める中で、既に私には、金光大神は〝信心ができている〟という前提があることに気づかされたからです。

今回の研究（「金銭融通による「さしむけ」の様相―「金乃神様金子御さしむけ覚帳」を手がかりに―」）では、金銭融通が記された「金子覚帳」と、参拝者の情報が記された「広前歳書帳」との対照を行いました。そこからは、時間的に継続する金銭融通のやりとりが、繰り返される参拝の営み（はたして、それが私たちの思い描く参拝だったのかどうかわかりませんが）と共に行われている様子が浮かび、また、金光大神はそのやりとりを大事なこととして振り返っている様子もうかがえました。そこには、私が前提としていたような、救う者／救われる者といった一方向的な金光大神と参拝者との関係とは異なり、出来事を振り返ることによって、金銭融通や参拝者との応答に、神の働きを感得させられていく金光大神の姿を想像させられました。

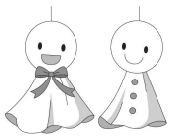
さて、そのようなことを思いながら検討会に参加しました。今年度提出された、九本の研究報告と二本の業務報告に向き合っていると、上記したような私の気付きが、他の研究とも関心を共有したものであると感じさせられることとなりました。とりわけ、共通性があると感じたのは、山田報告（「明治中期から大正期にかけての社会と金光教―社会事業の実践に見る社会の現前性と信心への意味に向けて―」）です。

山田報告は、明治中期から大正期の本教信奉者における、社会事業への関心に端を発し進められてきた研究です。同報告は、信心する者として社会事業の実践者を捉えたり、救う側としての主体性から社会的有用性を発揮するという、従来の信心実践への見方に問いを投げかけるものとなっていました。具体的には、日本赤十字事業加盟をめぐる佐藤範雄や金光萩雄の経験、東備連合会による女囚携帯乳児保護事業の経験などを挙げ、実際に苦難に直面し救済を求める人に出会ったとき、動き出さずには居られない人々の姿を、歴史実証的に論じています。

私は、そうした社会の有り様に出会い、助かりに向けて動いてしまう他律的実践性が、訪れた者への金銭融通を行う金光大神の様子と重なり、興味深く感じました。それは、既にある信心の上に実践という経験を積み重ねていくということではなく、実践を通じてその経験が自身に向けて問われることで、神の働きや信心を感じとるという有り様を考えさせられたからです。

そして、その意味では、この度提出された一つ一つの報告すべてが、それぞれの研究者による資料との出会いに導かれて浮かんできたものであるようにも思い至らされます。そのようにして、それぞれの側面から本教信仰の歴史に光が当てられてきての今であり、私も、その一翼を担えるよう、なお一層、研究内容の充実を図っていきたいと思います。

（香川・花之宮教会）



業務報告に取り組んで思うこと

資料室長　毛利義幸

本所では、教団の資料管理の中心的役割を担うべく、関係諸機関の協力を得つつ、資料の収集・保全・管理に努めてきている。特に近年は、多様な研究意図に応ずるべく、開所以来現在まで収集されてきた資料について、総合的な把握が一層求められている。

そこで、この度資料室では、そうした資料管理・活用上の課題について整理するべく、現時点での状況を令和四年度業務報告としてまとめ、提出する運びとなった。

まず、私は、元資料室長の堤光昭先生による「本所における資料収集の経緯とその概要」（紀要二六号）で確認されて以降の、平成期に収集された資料群を中心に、その収集経緯の把握に努め、「本所における資料の管理と活用の歴史及び現状について」と題し、本所の資料管理の歴史をまとめた。

同じく室員の金子信栄主事は、本所が継続的に収集・管理してきた書付資料の現状について報告した（「書付資料の管理・活用について」）。金子報告では、金光大神在世時の神名書付や天地書附をはじめ、帰幽以後の札類を含めた様々な書付資料の現状について改めて把握し、今後の管理・活用に資するべく取り組んだ。具体的には、元助手の鈴木一彦先生による「本教信仰にとっての書付や札の持つ意味について―現存する神名書付・天地書附・守り札より窺う―」（平成一三年度研究報告）の別冊資料を手がかりに、現時点での一覧表データを作成し、さらにその上で今後考えるべき課題が探られた。

「資料の現状把握と管理・活用」をテーマとした両報告は、資料管理に関わる課題を資料室のみならず全所的に共有し、今後の管理態勢の一層の充実化を図ろうとするものである。

なお、こうした今後の資料管理に関わる課題は、当然、本所に限らず本教各機関や各教会にも広く関わってくる。例えば本部教庁では、庁舎内で保管しきれない古い書類が祭場に移管されているが、その保存環境の改善が懸念点となっているという。また、図書館においては、展示品等物品類の保管スペース確保のため、こちらも一部が祭場移管となっているが、同様に保存環境が問題とされているようだ。そして、各センターや各教会等からも、保管スペースや環境の問題が聞かれる。中には、本所に連絡を下さり、移管されたことで資料として保存でき散逸を免れた例もある。しかし、想像するに、残念ながら不要なものとして処分されてしまうケースの方が多いのではないだろうか。

何が「資料」に該当するかは、なかなか判断が付きがたく、見る人が見れば……というものも確かにあるかもしれない。しかし、これまで数え切れない資料に触れ、そしてこの度業務報告に取り組んでみて改めて思わされるのは、信心の営みの記録全てが貴重な資料であり、本教の「歴史」そのものと言えるのではないかということだ。もし、お教会で所蔵されている文書等の保存や管理でお困りの場合は、是非本所にご一報頂きたい。

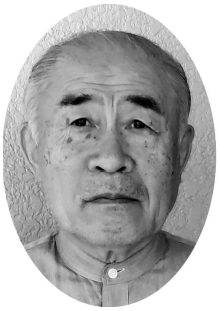
さて、このように、教内外を問わず歴史資料の保全の重要性が指摘される昨今、巷では公文書管理の専門家である”アーキビスト“が注目されている。本所内で資料管理の実務を担ってきた資料室は、お道の”アーキビスト“を目指して、信心の営みとその歴史を後世へと伝えていくための資料の保全と環境整備に、より一層、努めて参りたい。全教の皆さまのご支援とご協力を、切に願っている。

（香川・丸亀東教会）

徒然なるまま

輪郭と内実

評議員　阪井澄雄



御本部在職当時の思い出などを、という御示唆で、大まかな記憶を頼りに辿り直してみることとします。

佐藤光俊内局は、結界取次の充実と助かりの実現に向けた取り組みを軸に、平成一八年九月に発足しました。一方で、財的課題と共に避け得ない教団施設の大改修に備えて、極力歳出を抑えて叶うなら積立でもと願っての出発から一年経たない平成一九年の夏のことです。旧金光会館の老朽化による耐震性の不安が顕在化して休業の止む無きに至ったことが契機となり、金光会館代替施設と共に、予てからの懸案ながら手付かずであった本部広前会堂・祭場の耐震補強の必要性が急遽教務日程に上りました。一〇月末には関連の会議が起こされ、立教一五〇年の生神金光大神大祭まで二年を切っていましたが、短期間に会議を重ねて計画が練られ、平成二〇年二月の上申に至りました。

この耐震に関する慌ただしい日程の中、そもそも擁壁も含めた耐震検査の方法や規模の選択、また示される検査結果など、一般の建築では耳にしない単語や数値ばかりで理解するのも困難でした。一度目の会合でのこうした切実な感触から、”今回の有識者を招聘する会議は、従前のように教務が資料を説明して専門家の意見を聴き、取りまとめて施工業者と交渉するという態勢では、内容的にも時間的にも用を成さない。検査・設計するゼネコンと教内の専門家が直接に議論出来る場にすべきではないか“という所管の坂浦財務部長の提起で、直ちに具体化しました。

有識者として会合に出て下さった御信者たちは皆、大手や中堅のゼネコンで建設や土木の実務に携わる現役の技術者で、大半が輔教でもあったからか、瞬く間に結束ができました。新たな仕構えで臨んだ会議では、ゼネコン側も教内の専門家も、それぞれが技術者としての知識や経験をもって最適の解を見出すべく、専門用語や生の数値が飛び交う白熱した議論が進みました。出版や映像といったメディアの部門では早くから教内の専門家の力をお借りしていましたが、それらの会議とは異なった緊張感が流れる中で協議・検討が進められて案がまとまり、平成二〇年夏から翌年三月にかけて、会堂・祭場の耐震診断から補強工事、北ウイング両サイトの建設が実施されたのでした。

今、改めて目を向けさせられるのは、輔教に代表される信奉者の教団活動への参画を企図した制度を支える内実です。輔教は「本教の信心を伝えるため、進んで教会活動を担うとともに、教団活動に参画する」と意義づけられています。けれども耐震関連の動きの中で、輔教という立場と当該の働きは「べき論」で見てしまうと何か足りなくて、どうも違うように感じます。

制度と人（信心）とは、輪郭と内容（内実）といった関係で、信奉者個人あるいは相互の間に自ずと醸され満ちている空気というか、”お役に立ちたい“、”御用にお使い頂きたい“というエネルギーや可能性、幾多の大きな事業を成し遂げて来られた道の先人がたの、信心の喜びに根差す豊饒な“御用精神”にも繋がるものを、現下の教団として願われる信奉者像に沿って、制度の輪郭線で囲んだのが、例えば輔教ということなのだろうと思うのです。

輔教志願者の名簿を添えて御届けに参りますと、金光様は頁をゆっくり繰りながら一人一人の上を御祈念下さった後に御決裁になった稟議書をお下げ下さいます。これは「輔教は、本人の願い出により、教主が任命する」という規程の内実の、表に現れるほんの一場面ですが、金光様だけでなく推薦する在籍の教会長も日々に

祈念を込められ、もとより御当人たちも長年の御信心の積み重ねの上に願いを新たにされてのことだと肌身に感じます。ですから制度の描く輪郭線に収まらずに、好い意味ではみ出している可能性もあるでしょう、内実も均等ではなく濃淡粗密があることでしょう。

振り返った出来事では、状況の迫りから幸いにも新たな可能性を拓く方向を選ばせてもらえたのですが、制度に則って教務を執行する立場としては、制度と内実の成り立ちと間柄に絶えず意を用い、その可能性を狭めることのないように、という姿勢が大切なのだろうと思わされます。

（大阪・東堀教会）

時時歳歳

第23回教学講演会（10月1日）

駐輪場屋根張り替え工事（4月～5月）

坪庭の池掃除（4月21日）

彙報

（令和四年六月一日
～令和五年五月三一日）

▲人事関係▼

一、職員

○主事柏原正一、一月三一日付で辞任、翌二月一日付で御用奉仕に採用、五月三一日付で辞任。○教師安武格、三月一〇日付で書記に任命。○部長岩崎繁之、三月三一日付で部長辞任により第一部長の指名を解く。○部長高橋昌之、四月一日付で第一部長を兼務。○所員森川育子、四月一日付で資料室員に指名。○助手塩飽望、四月一日付で所員に任命。

二、研究生

令和四年度

○研究生大武利沙、九月三〇日付で委嘱期間満了。

令和五年度

○教師森定展開、五月一日付で研究生を委嘱。

三、評議員

○評議員森山恵美子、八月九日で任期満了、翌八月一〇日付で再任。○評議員高橋寛志、八月三一日で任期満了（二期八年）。○評議員阪井澄雄、一月三一日付で任期満了、翌二月一日付で再任。

※五月三一日現在

所長、部長二名、幹事、所員五名、助手一名、事務長、主事二名、書記一名、臨時御用奉仕一名、研究生一名（計一六名）、嘱託六名、研究員八名、評議員五名。

研究生入所式（前列左から安武格書記、所長、森定展開研究生）

SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。所外から玉稿をお寄せ頂きました先生方には、厚く御礼申し上げます。

作年の夏、客殿の屋根、それも棟木と装飾部分との境目辺りに、ミツバチが巣を作りました。折からの暑さで蜜蝋が溶けてしまったのか、大会議室天井裏には、水溜まりならぬ蜂蜜溜まりができていました。上から滴り落ちてくる蜂蜜をブルーシートで受けたり、天井裏に上がって掃除したりと、一時所内が騒然となりました。

近年、急激に数を減らしている貴重なニホンミツバチとあって、どのように対応したらよいか、頭を悩せられましたが、養蜂に詳しい木村正明先生（元学院職員、仮屋浦）にご協力頂き、屋外に設置した巣箱に、無事移すことができました。

巣箱は先生が教会まで持ち帰り、後日、研究所のミツバチ達が集めたという蜂蜜の小瓶を頂戴し、皆で賞味しました。市販品よりもはるかに濃厚で、ほんのり酸味が加わった味わいに、文字通り舌鼓を打ちました。

今春、ミツバチ達は、倉庫脇に積んであった枯れ木に集まってきました。慌てて周辺を取り片付け、ミツバチ達には速やかにお引っ越し頂きました。㋝

発行・印刷　金光教教学研究所
岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三
電　話（〇八六五）　四二―三一一七
ＦＡＸ（〇八六五）　四二―三一一九
http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html